

2018年（平成30年） 2月16日（金曜日）

毎週（金）14:00発行

発行所 (一財)日本エネルギー経済研究所  
石油情報センター電話 (03) 3534-7411 (代)  
FAX (03) 3534-7422〒104-8581 東京都中央区勝どき1-13-1イヌビル・カドキ11階  
ホームページ <http://oil-info.ieej.or.jp>

## ■ 概況

2/1~2/7のNYMEX・WTIは、61.79~65.80ドルの範囲で軟化し推移した。

2月8日は、前日のEIA 週報が米国産油量が日量1,000万バレルを超えたことや原油・製品在庫の積み増し報告等、米国の供給過剰懸念を背景に5営業日続落し、1月2日(60.37ドル)以来5週間振りの安値を付けた。3月限の終値は前日比0.64ドル安の61.15ドルだった。

週末9日は、継続する供給過剰感に加え、世界的な株安を背景としたリスク回避姿勢が強まり、6営業日続落し、1ヵ月半振りに節目の60ドルを割り込んだ。ペカーヒューズ社調べの米国内石油掘削リグ稼働数が791基と前週比26基増加したこと、また、イランのザンガネ石油相による将来同国が470万バレルへ増産を計画するとの発言も、相場を下押しした。3月限の終値は前日比1.95ドル安の59.20ドルだった。

週明け12日は、米国株価の大幅上昇を背景にリスク投資意欲が回復し、7営業日振りにわずかながら反発した。ドル安の進行やベネズエラにおける減産の動きも支援材料となったが、供給過剰への警戒感も強い。3月限の終値は前週末比0.09ドル高の59.29ドルだった。

13日は、同日のIEA石油市場月報が今年は米国等非OPEC産油国の増産が需要を上回るとの見通しを発表したことから、小幅反落した。3月限の終値は前日比0.10ドル安の59.19ドルだった。

14日は、米国株価の回復を背景に、EIA米国在庫週報で、3週連続で原油在庫が積み増したものの市場予想以下であったことなど、米国の供給過剰感が後退、サウジのファリハ・エネルギー相の早期減産終了を否定する発言もあって反

発、4営業日振りに60ドルを回復した。3月限の終値は前日比1.41ドル高の60.60ドルだった。

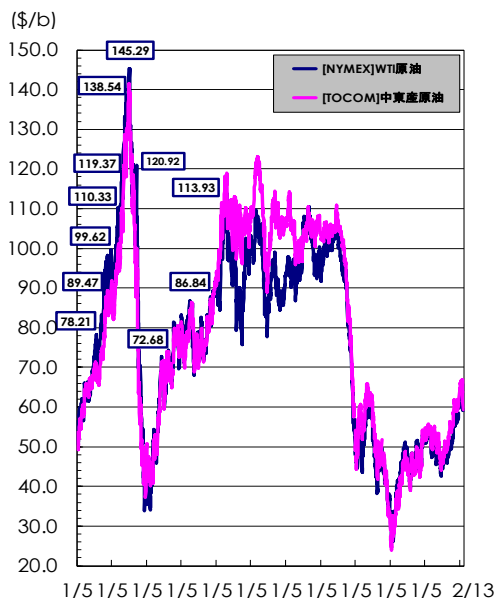
アジアの指標原油である中東産バイ原油/東京市場(3月渡し)は、前週64.10~66.90ドルの範囲で推移した。2月8日62.40ドル、9日61.40ドル、13日59.90ドル、14日は59.60ドルで推移した。

為替は、前週109.03~109.90円の範囲で推移した。2月8日109.38円、9日108.88円、13日108.73円、14日107.85円で推移した。

主要元売会社の2月第3週に適用する卸価格は、全社、ガソリンが2.5円の値下げ、軽油が1.5円の値下げ、灯油が1.0から1.5円の値下げとなった。原油価格は値下がりし、為替レートもわずかに円高で、原油調達コストは値下がりした。

そのような中で、2月13日時点の小売価格は、ガソリンが前週比横ばい、軽油は0.1円の値下がり、灯油は同0.2円の値上がりだった。ガソリンは2週連続の横ばい、軽油は31週振りの値下がり、灯油は21週連続(18週ベース)の値上がりだった。この週(2月第2週)の原油コストは値下がりし、元売の卸価格は、全社が、ガソリンを1.0円引き下げ、軽油と灯油を0.5円引き下げた。

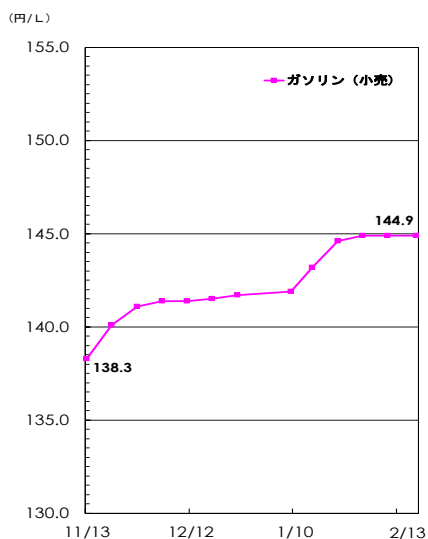
原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	2/4 ~ 2/10	3,642 ▲123	▼ -
	トッパー稼働率 (%)	"	93.0 ▲3.2	▼ -
	原油在庫量 (千kl)	2/10	12,927 ▼-441	▼ -
価格	中東産原油(TOCOM) (\$/bbl)	2/13	59.40 ▼-5.27	▲ 4.6
	WTI原油(NYMEX) (\$/bbl)	2/12	59.29 ▼-4.86	▲ 6.4
	原油CIF単価 (\$/bbl)	1月中旬	64.49 ▲1.16	▲ 11.13
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	45,794 ▲748	▲ 6,707
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	112.88 ▲0.19	▲ 3.57
	外国為替TTSレート (¥/\$)	2/13	109.73 ▲1.17	▲ 5.23



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比	
需給	生産	2/4 ~ 2/10	991 ▼ -58	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	940 ▲ 6	▼ -	
	輸出	"	59 ▼ -52	▲ -	
	在庫	2/10	1,722 ▼ -7	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/6 ~ 2/12	61.1 ▼ -1.0	▲ 13.4	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	2/6 ~ 2/12	57.7 ▼ -1.9	▲ 8.2
		(TOCOM/中部)	2/9	56.9 ▼ -4.1	▲ 7.0
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/13	144.9 ➡ 0.0	▲ 14.1	

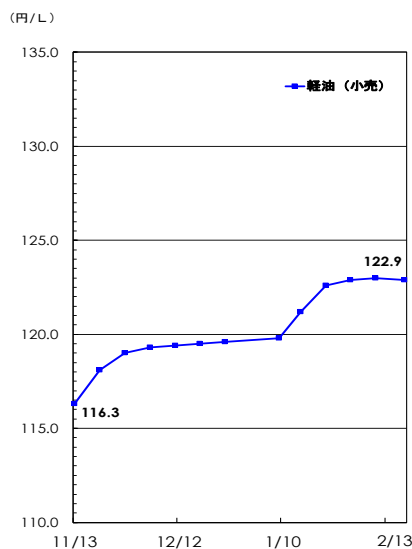
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

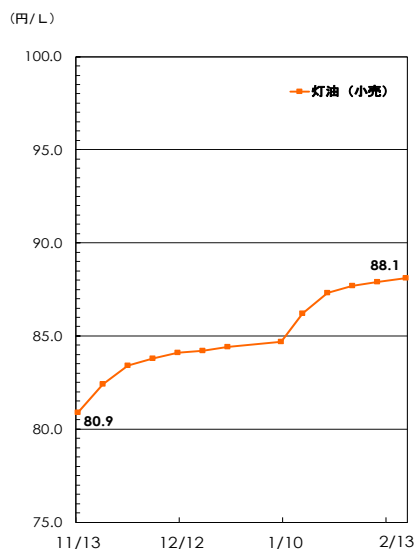
軽油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	2/4 ~ 2/10	750 ▲ 4	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	634 ▼ -56	▲ -	
	輸出	"	262 ▼ -22	▲ -	
	在庫	2/10	1,317 ▼ -146	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/6 ~ 2/12	61.9 ▼ -0.2	▲ 13.6	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	2/6 ~ 2/12	60.0 ➡ 0.0	▲ 14.0
		(TOCOM/中部)	2/9	-	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/13	122.9 ▼ -0.1	▲ 12.7	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	2/4 ~ 2/10	464 ▲ 27	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	621 ▼ -42	▲ -	
	輸出	"	0 ▼ -35	➡ -	
	在庫	2/10	1,275 ▼ -157	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/6 ~ 2/12	65.0 ▼ -0.1	▲ 14.6	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	2/6 ~ 2/12	64.4 ▼ -0.7	▲ 15.6
		(TOCOM/中部)	2/9	64.8 ▼ -0.5	▲ 15.3
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/13	88.1 ▲ 0.2	▲ 10.0	



■ 関連情報

1 海外/原油

2月14日のNYMEX市場WTI原油は、ドル高により売りが先行したものの、米国株式市場の回復、底打ち感を背景に、米エネルギー情報局(EIA)の在庫週報で、米国内原油在庫が前週比180万バレル増と3週連続で増加したものの、市場予想(同280万バレル増)を大きく下回ったこと、また、民間調査会社調べのWTI原油先物受渡点クッシングの原油在庫が同360万バレル減と大きく取り崩されたことから、米国の供給過剰感が和らぎ反発、4営業日振りに60ドル台を回復した。さらに、サウジのファリハ・エネルギー相が早期の協調減産終了を否定したこと、外為相場でドル安・ユーロ高に反転したことも支援材料となった。3月限の終値は前日比

1.41ドル高の60.60ドル、4月限の終値は前日比1.48ドル高の60.51ドルだった。

EIAによると、2月12日時点のガソリンの小売価格は、前週比3.0セント値下がりの1ガロン2.607ドル(75.5円/ℓ)となった。ディーゼルは前週比2.3セント値下がりの3.063ドル(88.7円/ℓ)。ガソリンは8週振りの値下がり、ディーゼルは3週振りの値下がり。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、平成30年2月4日～2月10日に休止したトッパー能力は18.4万バレル/日で、前週に対して3.4万バレル/日減少した(全処理能力は351.9万バレル/日)。原油処理量は364.2万klと、前週に比べ12.3万kl増加。前年に対しては41.7万klの減少。トッパー稼働率は93.0%と前週に対して3.2ポイントの増加、前年に対しては3.2ポイントの減少となった。

生産は前週に比べて灯油、軽油が増産となり、その他の油種で減産となった。ガソリン/5.6%減、ジェット/32.0%減、灯油/6.1%増、軽油/0.6%増、A重油/15.7%減、C重油/11.9%減。今週のC重油の輸入は11.2万kl(前週比6.8万kl増)。軽油の輸出は26.2万kl(前週比2.2万kl減)。

出荷(輸入分を除く)は、前週比ではガソリン、ジェットが増加となり、その他の油種で減少となった。前年比ではジェット、灯油、軽油が増加となり、その他の油種で減少となった。ガソリンの出荷は94.0万 kl(対前週0.7%増)と2週連続で前週比で増加、2週振りで前年比で減少となり、6週連続で100万klを下回った。ジェット12.1万kl(対前週90.8%増)、灯油62.1万kl(対前週6.3%減)、軽油63.4万kl(対前週8.2%減)、A重油28.5万kl(対前週23.2%減)、C重油27.6万

kl(対前週27.1%減)。

(単位:千KL)

	今週 (2/4 ~ 2/10)	前週 (1/28 ~ 2/3)	前週比	
ガソリン	940	934	▲ 6	(1%)
ジェット燃料	121	63	▲ 58	(92%)
灯油	621	663	▼ -42	(-6%)
軽油	634	690	▼ -56	(-8%)
A重油	285	371	▼ -86	(-23%)
C重油	276	379	▼ -103	(-27%)
合計	2,877	3,100	▼ -223	(-7%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

2月10日時点の在庫は、A重油、C重油が積み増しとなり、その他の油種で取り崩しとなった。前年に対しては、すべての油種で取り崩しとなった。

ガソリンは172.2万kl、前週差0.7万kl減。前年に対しては2.3万kl少ない。

灯油は127.5万kl、前週差15.7万kl減。前年に対しては25.3万kl少ない。

軽油は131.7万kl、前週差14.6万kl減。前年に対しては28.5万kl少ない。

A重油は68.5万kl、前週差0.3万kl増。前年に対しては6.4万kl少ない。

C重油は193.6万kl、前週差2.8万kl増。前年に対しては1.9万kl少ない。

(単位:千KL)

	今週 (2/10)	前週 (2/3)	前週比	
ガソリン	1,722	1,729	▼ -7	(-0%)
ジェット燃料	737	796	▼ -59	(-7%)
灯油	1,275	1,432	▼ -157	(-11%)
軽油	1,317	1,463	▼ -146	(-10%)
A重油	685	682	▲ 3	(0%)
C重油	1,936	1,908	▲ 28	(1%)
合計	7,672	8,010	▼ -338	(-4.2%)

### 3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

2月6日から2月12日の原油価格は、前週対比で値下がりし、為替レートもわずかに円高で、原油コストは値下がりと見られる。

陸上スポット価格は、2月6日～2月12日までの間、ガソリン114～115円台で値下がり、軽油61～62円台で値下がり、灯油64～65円台でわずかに値下がりし推移した。

海上スポット価格は、同期間で、ガソリン119～120円台で上昇後やや値下がり、軽油65円台で横ばい、灯油71～

72円台で上昇後やや値下がりし推移した。

先物価格は、同期間で、ガソリン110～112円台で大きく値下がり、軽油60円台で横ばい、灯油63～65円台で上昇後大きく値下がりし推移した。

元売の卸価格は、ガソリンは2.5円の値下げ、軽油は1.5円の値下げ、灯油は1.0～1.5円の値下げとなった。

### 3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

製品スポット市況は、海上の灯油・軽油の値上がり、先物軽油の横ばい以外は、値下がりにした。

2月第3週(2月15日～2月21日)適用の元売卸価格に影響を与える直近の陸上スポット価格(2月6日～2月12日千葉、川崎、中京、阪神の4地区の陸上ラック価格平均値)は、ガソリンは1.0円の値下がり、灯油は0.1円の値下がり、軽油は0.2円の値下がりだった。東京湾渡しの海上スポット平均価格は、ガソリンが0.2円の値下がり、灯油は1.0円の値上がり、軽油は0.2円の値上がりだった。先物価格は、ガソリンが1.9円の値下がり、灯油は0.7円の値下がり、軽油は横ばいだった。原油価格は値下がりし、為替もわずかに円高で、原油コストは値下がりにした。

2月第3週の大手元売の卸価格は、ガソリンが2.5円の値下げ、軽油が1.5円の値下げ、灯油が1.0～1.5円の値下げとなった。なお、元売会社は、2010年から卸価格の改定に際して、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断する方式としたが、2014年6月から、原油調達コストをより重視する方式に変更した。

(RIM)		(単位: 円/%)		
陸上ローリー4地区平均	今週 (2/6～2/12)	前週 (1/30～2/5)	前週比	
レギュラー	61.1	62.1	▼ -1.0	
灯油	65.0	65.1	▼ -0.1	
軽油	61.9	62.1	▼ -0.2	

(TOCOM)		(単位: 円/%)		
期近物/終値[平均]	今週 (2/6～2/12)	前週 (1/30～2/5)	前週比	
レギュラー	57.7	59.6	▼ -1.9	
灯油	64.4	65.1	▼ -0.7	
軽油	60.0	60.0	➡ 0.0	

※上記価格は税抜き価格

参考値 (2/6～2/12実績値)		(単位: 円/%)		
油種	現物	先物	平均	
ガソリン	▼ -1.0	▼ -1.9	▼ -1.5	
灯油	▼ -0.1	▼ -0.7	▼ -0.4	
軽油	▼ -0.2	➡ 0.0	▼ -0.1	
A重油	▼ -0.1			

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

### 4 国内/製品小売価格

2月13日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週比横ばいの144.9円、軽油は同0.1円安の122.9円、灯油は同0.2円高の88.1円だった。ガソリンは2週連続の横ばい、軽油は31週振りの値下がり、灯油は21週連続(18%ベース)の値上がりだった。都道府県別に、ガソリンの値上がりは14県、横ばいは17都県、値下がり16道府県だった。全国最安値は徳島県の139.7円(同0.1円安)、次が埼玉県(140.6円(同0.2円高)、最高値は沖縄県の152.8円(同0.4円高)だった。最も値上がりしたのは、0.4円高の沖縄県(152.8円)、宮崎県(146.2円)、三重県(144.4円)、兵庫県(144.0円)、千葉県(141.0円)の5県だった。

先週の原油コストは値下がりし、元売会社の卸価格は、全社が、ガソリンは1.0円の値下げ、軽油・灯油は0.5円の値下げだったが、2週連続でガソリン小売価格は横ばいとなった。今週の原油価格は値下がりし、為替レートもわずかに円高で、原油コストは値下がりにした。次週(2月19日)のガソリンの小売価格は値下がり、灯油の小売価格は小幅な値下がり予想される。

(資工庁公表)		(単位: 円/%)			
週動向	今週 (2/13)	前週 (2/5)	前週比	直近高値	
レギュラー	144.9	144.9	➡ 0.0	08/8/4	185.1
灯油	88.1	87.9	▲ 0.2	08/8/11	132.1
軽油	122.9	123.0	▼ -0.1	08/8/4	167.4

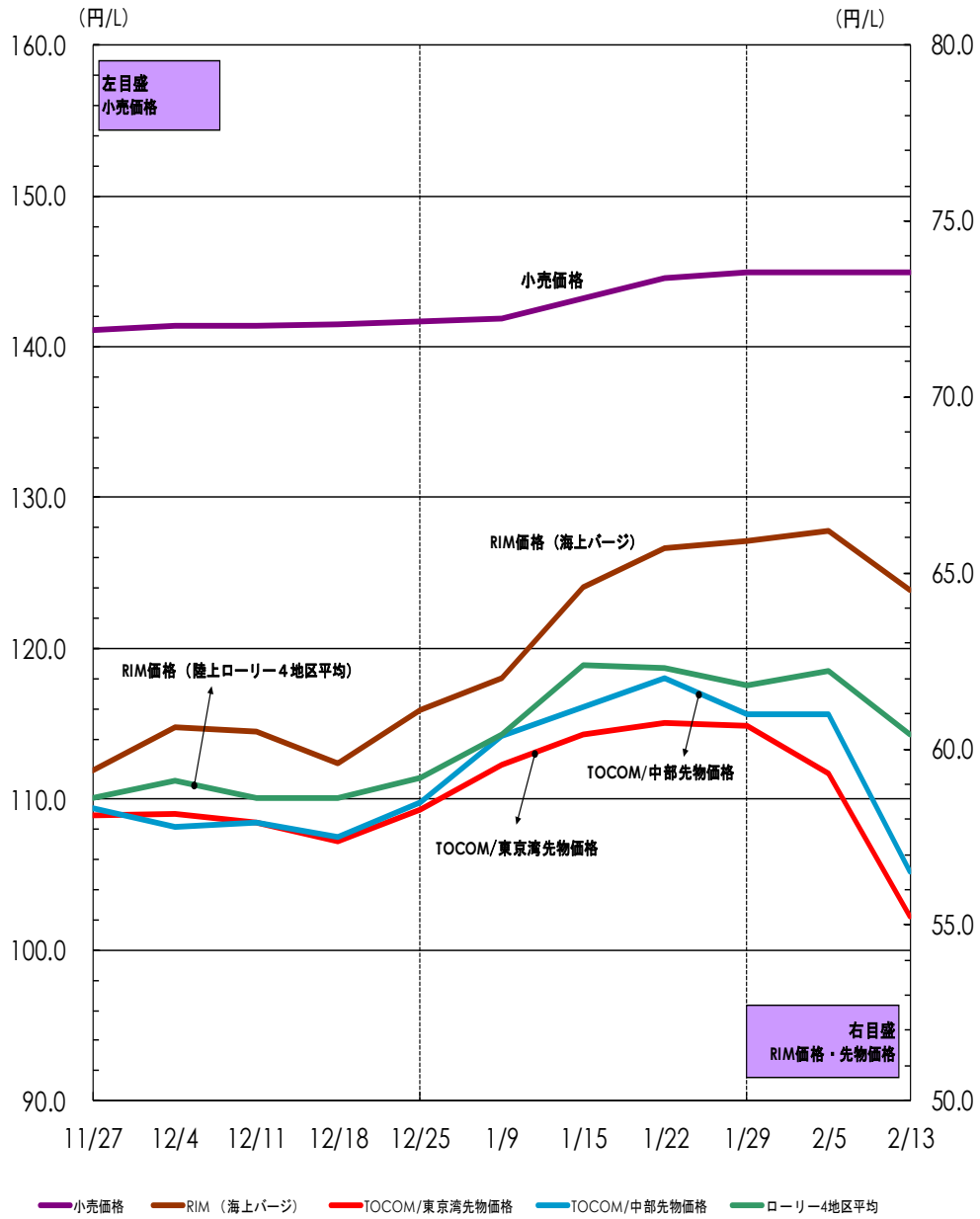
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

# ガソリン価格推移

(2017/11/27 ~ 2018/2/13)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格  
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

## ■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<http://oil-info.iej.or.jp>) にも掲載しています。  
次回(2017第44号)の公表は、2/23(金)14:00です。

「セルフSS出店状況」(平成29年9月末現在)は、12月13日(水)14:00に公表しました。当センターのホームページをご覧ください。

### 本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターヘドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。

当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。

また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

### 「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。

当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

### 本レポート掲載データの出所について

#### ①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。

「出荷」は当センターの推計。

#### ②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM (Telegraphic Transfer Middle rate : 中値)を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

#### ③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

#### ④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の東京、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用。

#### ⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

#### ⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000 SSを対象に週次ベースのSS店頭における現金一般価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁-HPIに掲載)。